

小学生のアルファベット知識と音素認識能力の関連について

Alphabet Knowledge and Phonemic Awareness of Elementary School Children

アレン玉井光江（文京学院大学）

沓澤糸（ARCLE/株ベネッセコーポレーション）

I. アルファベット知識と音素認識能力

公立小学校へ英語活動が導入されて以来、現場においては英語の「読み」「書き」指導を避け、音声による指導が続けられている。英語のリテラシー指導が敬遠される理由は（１）中学校英語の前倒しになる、（２）子どもたちの負担になる、（３）指導法がわからないというもので、十分に理解できる。しかしながら、英語活動を導入した公立小学校のうち１，２年生で 14%程度、３，４年生で 20～25%程度、５，６年生で 31～34%の学校ですでに「文字に触れる活動」が導入されている（文部科学省平成 16 年度調査）。現場では、文字に対して自然に興味を示す子どもたちの要求を無視することはできないのであろう。

リーディング能力の発達に最も大きく影響するのが、アルファベット認識と Phonemic awareness（音素認識能力）であると報告されている（Ehri, Nune, Willows, Schuster, Yaghoub-Zadeh, & Shanahan, 2001）。さらに、英語圏で育つ子どもたちはアルファベットを習得するときに文字を視覚的に学習しているだけではなく、Phonemic awareness も伸ばしている（Treiman, Tincoff, & Richmond-Weltry, 1997）という報告もある。

本研究においては小・中連携を視野にいれ、小学校でできる英語のリテラシー指導について、アルファベット知識と音素認識能力の発達という観点からデータを収集し、分析した結果を発表する。

II. 研究目的

小学校高学年（５，６年生）のアルファベット知識の発達を探る。

音素認識能力を測定する。

アルファベット知識の発達と音素認識能力の関連性を探る。

III. 研究方法

参加者は A 国立附属小学校に通う 5 年生（男子：77 名、女子：74 名）、6 年生（男子：77 名、女子：74 名）の合計 302 名である。当該参加者は 2005 年 7 月に 1 度目のアルファベット知識テストを受けている。今回は大文字の指導を受けた 5 年生と、大文字・小文字の指導を受けた 6 年生のアルファベット知識の発達を測定する。また、5 年の参加者には音素認識力を測定するテストも受けてもらった。

アルファベットテスト

テストは大きく 4 つのパートに分かれている。

- | | |
|--------------------------------|---------|
| (A) アルファベット 1 文字ずつの単位での聞き取りテスト | (25 項目) |
| (B) アルファベット 2、3 文字単位での聞き取りテスト | (11 項目) |
| (C) アルファベットの書きテスト | (14 項目) |
| (D) 絵を使った単語認識テスト | (6 項目) |

今回、アルファベット知識に関しては前回のテスト結果、明らかに天井効果が出ていると考えられる項目を新しい項目と入れ替える作業をした。その結果前回のテスト項目の90%を再使用し、新たに6項目を付け足した。

音素認識力測定テスト

テストは Open Oddity Test と End Oddity Test (Kirtley, Bryant, MacLean, & Bradley, 1989) という2種類のテストを用意した。

(A) 3つの単語のうち最初の音（もしくは音のつながり）が違うことばを選択する。具体的には次のような3つのセクションに分け、それぞれ8つの項目を用意した。

条件1	doll, deaf,	can	頭子音、母音、最後の子音全て違う
条件2	cap, can,	cot	頭子音は同じ、母音、最後の子音が違う
条件3	can, cap	lad	母音が同じ、頭子音、最後の子音が違う

(B) 3つの単語のうち最後の音（もしくは音のつながり）が違うことばを選択する。具体的には次のような3つのセクションに分け、それぞれ8つの項目を用意した。

条件1	mop, whip	lead	頭子音、母音、最後の子音全て違う
条件2	lip, tip	hop	最後の子音は同じ、頭子音と母音が違う
条件3	hid, lid	tip	母音が同じ、頭子音、最後の子音が違う

IV. 考察

音素認識力測定テストは Kirtley その他が英国の児童を対象に行ったテストを参考に作成した。彼らは幼児、児童がどのようにして音節内部構造を理解するのかを調査し、子どもは音素認識を発達させる前に onset-rime の文節能力を発達させていると報告している。

しかしながら、本研究の参加者は異なる結果を示した。英語の母語話者である Kirtley らの参加者と日本語を母語とする本研究の参加者の正答率パターンを詳しく検証していくと、日本人学習者は音節の内部構造を onset-rime に分節するのではなく、モーラ単位で分節しているのではないかと思われる。

アルファベット知識の発達については、5年生、6年生ともに点数が上昇していた。実際には、学校では秋は行事が多く、なかなか英語の活動の中でアルファベットを教える時間が少なかったにもかかわらず、学習効果が十分にあったことが判明した。また、前回の研究でも明らかになったように、アルファベットの「書く」能力がある参加者は単語認識が優れていることが再確認された。

参考文献

- Ehri, L. c., Nune, S. R, Willows, D. M., Schuster, B. V., Yaghoub-Zadeh, Z., & Shanahan, T. (2001) Phnemic awareness instruction helps children learn to read: Evidence from the national Reading Panel's meta-analysis. *Reading Research Quarterly*, 36,3, 250-287
- Kirtley, C., Bryant, P., Maclean, M. & Bradley, L. (1989). Rhyme, rime, and the onset of reading. *Journal of Experimental Child Psychology* 48, 224-245
- Treiman, B., Tincoff, R., & Richmond-Welty, E. D. (1997) Beyond zebra: Preschoolers' knowledge about letters. *Applied Psycholinguistics* 18, 391-409